

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



私たちは、医療福祉施設を中心に設計を行っています。クライアントの想いを叶え、それが社会貢献につながる設計を目指しています。

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町 10 番地

TEL:075-211-7277 FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



知的障害のある人の就労や進学以外の第三の選択肢「専攻科」・学校専攻科と福祉事業型専攻科「二つの専攻科」の実践や制度を比較し、青年期のゆたかな学びを考察する。

知的障害のある人の青年期の教育権保障

辻和美／著
A5判264頁
定価2600円＋税



障害のある子ども・若者たちに現代的課題として深く関わる「科学」「社会」の学習。どんな問題意識をもち、若者たちをみて、授業をつくるか、若者たちの反応は。

学習会開催

7月3日(日) 10:00～12:00

参加費＋書籍:2500円 参加費:1100円

(詳しくはこちら)



障害のある若者と学ぶ科学社会

丸山啓史／編
執筆 國本真吾・澤田淳太郎
塩田奈津・村上穂高
A5判122頁 定価1500円＋税



クリエイツかもがわ
CREATES KAMOGAWA

〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21 <https://www.create-k.co.jp>
TEL 075(661)5741 FAX 075(693)6605 送料240円(5000円以上無料)

長宗さん

今西さん

平田さん

井澤さん

稲さん

吉岡さん

里井さん

佐藤さん

清田さん

森さん

中村さん

「ひととしてあたりまえに生きたい」 「思いと運動をつぎの世代へ」

2018年4月号から4年以上にわたって連載いただいた、清田廣さんの「ひととしてあたりまえに生きたい」が、今号で最終回を迎えます。清田さんの運動史が詰まった連載を書籍にして発刊すべく、現在準備中です。今回、書籍への追加収録として、座談会を開催しました。ご協力いただいたのは、林さん（なかまの里家族の会「さとの会」会長、大阪聴覚障害者福祉会後援会会長）、今西さん（大阪聴覚障害者協会事務局長）、長宗さん（大阪ろうあ会館事務局長）、平田さん（あすくの里施設長）です。司会を中村さん（大阪聴覚障害者福祉会事務局長）、手話通訳を井澤さん（大阪ろうあ会館）、稲さん（大阪ろうあ会館）、吉岡さん（大阪手話通訳問題研究会）にお願いしました。佐藤さん（大阪聴覚障害者福祉会相談役）には、連載中ずっと、編集や打ち合わせのサポートをいただきました。



座談会では、連載への感想、ろうあ運動や施設建設のなかでろうあ者や家族のくらしはどう変わったか、そして、これからのろうあ運動や事業の課題・希望について、みなさんに語っていただきました。

大阪聴力障害者協会事務局長の今西伸行さん（写真）。「連載の前半は自身が生まれる前の話で、ろうあ運動の歴史の教科書のように勉強させてもらった」と話されました。そして、今号の最終回で清田さんが書かれた、運動のエネルギーとしてずっとある「怒り」という言葉に触れ、「今でも差別はたくさん残っている。そのことに対して、もっとみんなが怒っていける、怒りを共有できる活動をしていきたい」と話されました。



大阪ろうあ会館事務局長の長宗政男さん（写真）は、母親が手話サークルあすなろに関わっていて、小学校低学年のころから母親とあすなろの行事に参加していたとのこと。行事で行ったハイキングで、聞こえない長宗さんは母親ではなくろうあ部会の人たちについて行き、初めて大人たちが手話でろうあ運動について議論をしている姿を見たことがとても印象に残っていると話してくださいました。



学生のころに手話サークルに入ったことがきっかけでなかまの里へ就職し、現在はあすくの里の施設長をされている平田幸也さん（写真）。だれともコミュニケーションがとれないままずっと入院し、ふさいでいた方が、あすくの里に入所して見違えるほど明るく、手話を使って楽しそうにコミュニケーションされる姿をたくさん見てきて、「手話でコミュニケーションがとれる場所」の大切さを痛感していると平田さん。しかし、介護保険制度も障害福祉制度も、聞こえない人への支援を前提とした制度設計にはなっておらず、施設の運営状況はとてもきびしいことを指摘されました。

次号のトピックスでは、座談会の内容を少し紹介したいと思います。書籍は8月末の発刊を予定しています！

（写真・文 申 佳弥）

●特集● ケア労働の質を保障する条件～ケアと優生思想から考える～

女性や母親が抱える葛藤から生まれるケアのあたらしい地平線

ケア労働にひそむ優生思想を考える	岡野 八代	12
討論：岡野八代×藤井渉	藤井 渉	16
人とかわり、人を大切にできる		20
人とかかわり方を探究しつづけられる	山田須美子	24
	内藤 壮祐	26

●トピックス●

【PHOTO】 全国福祉保育労組大阪地方本部		28
【手記】 重度障害者が新型コロナウイルス陽性になり、入院したら		
	中野 まこ	30
まだ間に合う！ 大阪にカジノはいらん！	中山 直和	36
研究所を支えた豊田八郎さんを偲んで		40
第27回社会福祉研究交流集会 in 愛知のご案内		42

●連載●

WORK WORK——わくワク——

個性が輝くさを織り 社会福祉法人みんなの会 第一みんなの家		46
ミリタンが実現するフランスの福祉		
福祉を大切にする社会をつくるために	安發 明子	48
かさねあい、はぐくみあう保育実践		
自分を認めてくれる保育園	副島 帆果	50
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～		
「その人らしさを大切にする」ということ	渋谷 裕子	54
JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合 (16)		
パワハラのない職場づくりへ 防止対策は事業者の義務に		58
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (16)		
いつの間にか福祉の世界へ	阿藤 広志	60
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (36)	水野阿修羅	62
相談室の窓から		
自分の人生を模索し、切り開いていく若者たち	青木 道忠	64
育つ風景	清水 玲子	66
子どもたちがおひさまをたっぷり浴びて存分にあそぶ権利		
ひととしてあたりまえに生きたい (最終回)		
人としてあたりまえに生きられないことへの怒り	清田 廣	68
映画案内 『ドライブ・マイ・カー』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて		
5年ぶりの「ホームレスの実態に関する全国調査」	生田 武志	72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
○と△じゃ！	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ	77

みんなのポスト 44／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● 「人としてあたりまえに生きたい」

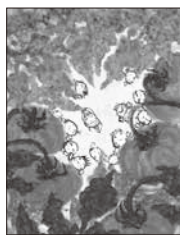
思いと運動をつぎの世代へ

福祉のひろば

2022年7月号

●表紙の絵●

神門やす子



女性たちがつなぐ バトン

佛教大学社会福祉学部教授 田中 智子

障害のある方と家族との初めての出会いは、高校生のころ、理学療法士をめざしていた知人につれて行ってもらったリハビリボランティアでした。手づくりの滑り台や平均台などが置いてあるマンションの一室に、筋力をつけるための装具をつけた三歳くらいのかわいい子どもがいました。親子で一日一〇時間近くのリハビリをしているのと、それを手伝うために多くのボランティアが関わっていました。帰り際、母親に「一年後にはきつと歩けるようになっていくので会いに来てください」と笑顔で言われました。知人は「医学的に歩くようになるのはむずかしいけれど、お母さんがそれを信じてリハビリをされている限り自分は手伝いたい」と言いました。その家族には、父親や小学生のお姉ちゃんもいるとのこと、あの体育館みたいな家でどのように暮らしているのだろうと、なんとなくモヤモヤした気持ちを抱えたまま帰りました。

その出会いをきっかけに障害児教育に進路を定め（教師という仕事は、教育実習で学校という組織に馴染めないと思い断念したのですが……）、大学時代は障害児者の余暇サークルに熱中しました。その当時は、支援費制度施行前で、休日の外出、家族や作業所旅行への同行、親が早朝から出かけるときに作業所のバスへの送り出し、入院時の付き添いなど、福祉サービスが届かないすきまの支援を個人的に依頼されることも多くありました。そのような機会に、子どもの障害がわかったときの悲しさやくやしさ（障害告知などに配慮がないことも多かったようです）、自分の仕事や、やりたいことをあきらめてきたこと、親戚付き合いや夫婦関係のことなど、いろんな話を聴かせていただきました。



たなか ともこ

専門は障害者福祉・家族福祉。研究テーマは、障害者家族に生じる生活問題。最近の仕事は、『知的障害者家族の貧困－家族に依存するケア』（2020年、法律文化社）、『障害者家族の老いる権利』（2021年、全国障害者問題研究会出版部）など。

そのような話を聴かせてもらうなかで、子どもの障害という偶発的事象により、なぜ親は人生のなかで多くをあきらめなければならないのだろう、というモヤモヤを抱えるようになりました。

それらのモヤモヤは、その後、私のなかで明確な問題意識になりました。ケアを引き受けるのはなぜ女性なのか？ あらゆる人の生老病死に不可欠なケアを担うことが、なぜ社会的リスクにつながるのか？ ケアラーであることと自分自身の人生はなぜ両立できないのか？ これまで取材や調査などを通じて出会ってきた女性たちが、その語りや生活を通して私に与えてくれた宿題の答えは、まだ見つかってはいません。

自分自身の子育てがはじまって、それらの問題は自分と地続きの問題であつたことに気づきました。現代社会における子育てをする親への社会的圧力は、人生を不自由にすると感じることもあります。一方で、ケアラーとしての気づきやつながりが、自分の人生に幅をもたせてくれるという実感もあります。

今、私と同世代の女性たちのなかに、障害のある子どもがいても働きたい！ 自分の人生を歩みたい！ と力強く主張する人が出てきました。それは、先輩たちがどのような状況にあつても、そのねがいを手離さずにくれたからだと感謝しています。先輩たちから受け取ったバトンを私も次の世代の女性たちに少しでも積み上げた社会として手渡したいと、研究者として、ケアの当事者として、できることをやっていきたいと思っています。

ケアのなかにある価値をみんなのものに

今号では、六月号にひきつづき、「ケア労働の質を支える条件」について考えたいと思います。先月号では、高齢、障害、児童、社会保障運動というそれぞれの現場の実態のなかから、その条件やヒントを探りました。今号では、そもそもケアとはなにか、なぜケアやそれを仕事とするケア労働の社会的評価がこれほどまで低く抑えられているのかについて、歴史をふり返りながら探ってみたいと思います。

コロナ禍をとおして「ケア」や「ケア労働」という言葉が広く使われるようになるなかで、前号や今号の特集タイトルでも「ケア労働」という言葉を使いました。ですが、読者の方からは、「ケア」という言葉がいまいちしっくりこない、ケア労働と福祉労働はなにがちがうのか、私たちがずっと追求し積み重ねてきた「福祉労働の専門性」とケアの議論はどうつながるのか、という感想もいただきました。言葉の定義や概念は、あらためて整理していく必要があると思います。それと同時に、世界中がコロナ禍を経験し、ケア労働への社会的評価や労働条件についての議論が、日本だけでなく世界

中で活発になっているいまだからこそ、分野を超えたたくさんの人とつながることで、このチャンス
を大きな流れに変え、具体的な変化・改善につなげていかなければいけないと感じます。

現在、総合社会福祉研究所をもっとたくさんの方に知ってもらい、つながり、活動を広げていくこ
とをめざして、研究所を紹介する短い動画を作成しています。そのなかで、石倉康次理事長は、「ケア」
という言葉は、福祉の専門家だけでなく、医療や教育、そしてひろく一般市民も参加できる総合的な
ものだと話しています。

特集のなかで、岡野八代さんは、ケアの現場には資本主義の範囲を超える、経済的な価格以上の価
値があると指摘しています。藤井涉さんは、ケアの現場での気づきやそこで生み出される価値が、社
会の矛盾に対抗し、社会を大きく変えていく力になると話されました。

「ケア」は社会を支える土台であり柱であると同時に、人間の可能性を引き出し発展させていくも
のです。そうしたケアの仕事をする人たちが評価され、大切にされ、いきいき仕事ができるとい
うことが、社会をつくっていくうえで不可欠だということを、国民的なコンセンサスにしていきたいとい
う思いを込めて、前号と今号では、「ケア労働」という言葉を使いました。ケアや福祉、そして福祉
労働やそこから生み出される価値が大切にされる社会をめざして、研究所や『福祉のひろば』として
すべきこと、できることを考えていきたいと思っています。

(編集主任)